

高×大専社
接続の視点で考える

社会の変化に対応する人材の育成に向けて、大学や専門学校では新たな教育プログラムや入試改革が進んでいる。本コーナーでは、今後の教育において重要なキーワードについて、高校と大学・専門学校・社会の接続の視点で考えていく。

キーワード

資質・能力の育成

企業

AIで代替しづらい人材が求められる時代。 企業は採用段階から思考力、問題解決能力を重視

デジタル化の進展や脱炭素社会への移行、生産年齢人口の減少など、社会のあり方は大きく変わり続けている。

社会が変化すれば当然、求められる人材像も変化する。2022年、経済産業省は今後の産業構造の転換を見据えた人材政策について検討するため、「未来人材会議」を設置。雇用・人材育成から教育システムまで幅広く政策課題について議論し、未来を支える人材を育成・確保するための大きな方向性と今後取り組むべき具体策を「未来人材ビジョン」として公表した。そこでは、意識・行動面を含む、仕事に必要な56項目の力の需要が今後どのように変化するかを予測している(図1)。それによると、15年は「注意深さ・ミスがないこと」「責

任感・まじめさ」「信頼感・誠実さ」が重視されていたが、50年には「問題発見力」「的確な予測」「革新性」が求められるようになる」と予測される。その背景には、AIやロボットで代替しやすい職種の雇用が減少する一方、代替しづらい職種や新たな技術開発を担う職種では雇用が増加することがある。

しかし、求められる力の変化は50年を待たずに既に始まっている。ベネッセキャリアが実施した「社会人調査2020・2021」では、営業、ITエンジニア、技術職といった職種において、思考力が高い人ほど、勤務先から成果や業績に対して高い評価を受けていることが明らかになっている(図2)。そうした状況もあってか、企業が

図1 社会で求められる力の変化(2015年→2050年)

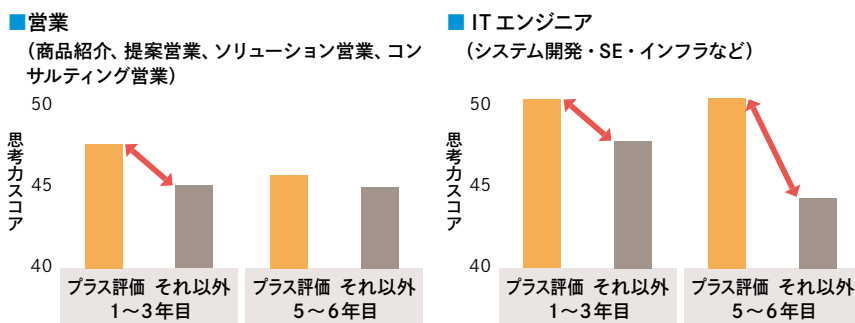
2015年		2050年	
注意深さ・ミスがないこと	1.14	問題発見力	1.52
責任感・まじめさ	1.13	的確な予測	1.25
信頼感・誠実さ	1.12	革新性*2	1.19
基本機能(読み、書き、計算等)	1.11	的確な決定	1.12
スピード	1.1	情報収集	1.11
柔軟性	1.1	客観視	1.11
社会常識・マナー	1.1	コンピュータースキル	1.09
粘り強さ	1.09	言語スキル:口頭	1.08
基盤スキル*1	1.09	科学・技術	1.07
意欲・積極性	1.09	柔軟性	1.07

*1 基盤スキル: 広く様々なことを、正確に、早くできるスキル

*2 革新性: 新たなモノ、サービス、方法等をつくり出す能力

※経済産業省「未来人材ビジョン」(2022年5月)を基に編集部で作成。数値は56項目の力の需要度を、平均値が1.0、標準偏差が0.1となるように補正したもの。

図2 企業でプラス評価を受ける人材の思考力スコア



※「ベネッセ i-キャリア社会人調査 2020・2021」より。成果や業績に対する評価について、「プラスの評価を受けている」または「どちらかというところプラスの評価を受けている」と回答した人とそれ以外の人で、「GPS-Business」の思考力スコアを比較。

図3 企業が新卒採用で重視する選考基準と採用した学生の水準とのギャップ

項目	重視する選考基準	ギャップ
人柄や性格	59.5	11.5
自社への熱意	43.5	9.5
汎用的スキル（思考力、問題解決力等）	42.6	14.3
採用ポジションへの適性	40.3	12.5
専門的スキル	32.3	8.9
資格（語学力、プログラミング等）	24.4	3.3
大学での履修状況や成績	24.2	4.3

※ベネッセ・キャリア まなぶとはたらくをつなぐ研究所「企業の『新卒採用動向』における調査 2025 一学修歴社会に向けた取り組み等について」（2025年9月22日時点）。数値は「選考基準として重視する資質・能力や適性」及び「採用学生の水準と比較して最もギャップの大きいもの」の回答率（％）。

図4 トランスファラブルスキル

研究を中心とする様々な活動の中で身につくことが期待され、研究・開発以外の幅広い業務でも活用できる資質・能力のこと。

■企業が博士人材に求める資質・能力（例）

学術面	①研究分野における高度な専門性	理論や文献から広範な知識を有し、研究等に活用
	②総合知	異分野の情報を組み合わせ得られた知見を問題解決に活用
能力面（汎用的能力）	①課題設定・解決能力、探究力	課題や問題点を見つけ出し、解決に向けて探究する姿勢を持つ
	②調査分析能力、情報活用能力、データ分析能力	収集した情報を統計的手法を用いて分析し、意思決定や問題解決に活用
	③研究遂行能力	目的や背景を理解し、課題設定を行い、計画を立て、遂行
	④論理的・批判的思考力	情報や主張を分析し、前提から結論を導く
	⑤コミュニケーション能力	自身の考えを明確に伝え、他者の意見を理解
	⑥プロジェクト管理能力	進捗状況を把握し、生じた問題に迅速かつ効果的に対処
資質面	①主体性	目標や価値観に基づいて行動し、行動や結果に対して責任を持つ
	②実行力	目標達成に向けて、困難や障害を乗り越えながら遂行
	③チームワーク、リーダーシップ、協調性	他者とコミュニケーションを取り、意見や感情を尊重し、作業を進める
	④物事をやり抜こうとする強い精神力（GRIT）	目標に対し、興味や熱意を持ち、障害や失敗に屈せず、継続的に努力
	⑤柔軟性・変化対応力	予期しない変化や新たな状況に迅速かつ効果的に対応
	⑥メタ認知能力	自身の進捗や成果を確認し、目標に向かって適切に行動

※経済産業省・文部科学省「博士人材の民間企業における活躍促進に向けたガイドブック」（2025年3月27日）を基に編集部で作成。表は一般社団法人日本経済団体連合会「博士人材と女性理工系人材の育成・活躍に向けた提言 - 高度専門人材がけん引する新たな日本の経済社会の創造」（2024年2月）を基に経済産業省・文部科学省が加工・作成したもの。

新卒採用の選考基準として重視する項目の上位には「人柄や性格」「自社への熱意」といった、従来から重視されてきたものに次いで「汎用的スキル（思考力、問題解決力等）」が挙がるようになってきている（図3）。なお、企業が求める選考基準と採用した学生の水準を比較して最もギャップを感じる項目も「汎用的スキル」であるため、企業は今後、採用において、問題解決のベースとなる能力を丁寧に見取るようになっていくことが予想される。

大学・専門学校

課題設定・解決能力、論理的・批判的思考力など、幅広く活用できるスキルの育成を目指す

25年2月に中央教育審議会できとりまとめられた、いわゆる「知の総和」答申（*1）では、大学や専門学校などの高等教育機関にとつて、「社会に出た後に評価される人材を育成している」ことを念頭に、学生の資質・能力を引き出し、どのように学修目標の達成に向けて指導していくか、という視点で教育課程を

デザインすること」は重要な責務であると述べている。また、経済産業省と文部科学省は、高度な専門性を備えた博士人材の産業界での活躍を進めるために「博士人材の民間企業における活躍促進に向けたガイドブック」をまとめたが、その中では、専門的な知識を教授するだけでなく、課題設定・解決能力、論理的・

批判的思考力、プロジェクト管理能力など、幅広い業務で活用できる「トランスファラブルスキル」（図4）を学生が自覚的に修得できるように教育課程、評価方法の構築を大学に対して求めている。そうした変化は大学入試の変化にもつながる。「知の総和」答申でも、探究学習などの成果を各大学の個別入試で評価することを求めており、総合型・学校推薦型選抜の拡大や、一般選抜における志望理由書や小論文・面接などによる多面的・総合的評価の導入は今後も続いていくことが考えられる。

高校 高・大・専・社で一貫して資質・能力を育成する

社会の変化を受けて、大学・専門学校そして企業が、学びや評価の点で連動して変化しており、高校教育においても、入試対策にとどまらず、「社会に出た後に評価される人材」を育てる視点で問題発見・解決能力などの資質・能力を育成していくことが重要となる（P.31図6）。次ページでは、探究学習を通じて資質・能力を育成し、それらを大学入試につなげている高校の事例を紹介する。

*1 中央教育審議会「我が国の『知の総和』向上の未来像～高等教育システムの再構築～（答申）」（2025年2月21日）

年内入試のマッチング度合いを検証する 出願検討会議を2年次の12月に実施

広島県・私立近畿大学附属広島高校・中学校 東広島校

探究学習を通じて育成する 資質・能力を定義

近畿大学附属広島高校・中学校 東広島校は4年前に、6年間の探究カリキュラムの見直しを図った。それまでは進路指導部が探究学習を担当していたが、「ICT探究教育推進室」を設置し、専任体制を整えた。併せて、変化の激しい社会で必要とされる力を身につけるため、探究学習で育てる力を①伝える力（情報活用力）、②関わる力（人間関係力・協働）、③動く力（計画行動力）、④解く力（問題解決力）の4つに定義した。

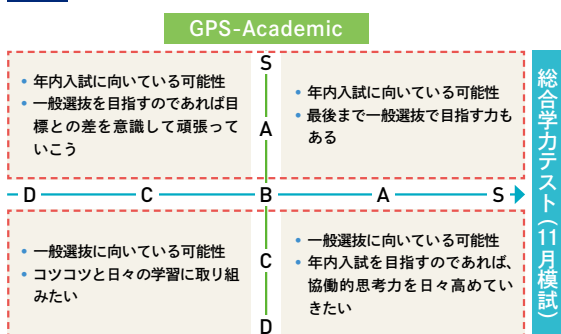
探究学習では教室外の活動に生徒が自ら選択して取り組めるよう、多くの機会を用意している。例えば、授業や学年の枠を超えた「探Qの会」を設け、綿花栽培やSDGsイベントの開催といった、実社会とかわる活動を通じて「動く力」「関わる力」を実践的に育んでいる。その成果は進学実績にも表れており、年内入試合格者が大幅に増加した。

年内入試への向き・不向きを 客観データで把握

「自主性を重んじた活動の経験を通じて、生徒は自分の興味を起点に努力できるようにになり、大学や社会においても自律的に学び続けることができると思っています」（橋本晃一校長）

同校では、身につけた資質・能力が希

図5 学力と非認知能力の相関



模擬試験の結果と非認知能力のスコアを基に、生徒の希望や活動経験も考慮しながら、一人ひとりに合った入試方式を見極める。

※学校資料を基に編集部で作成。

望する入試方式に合致しているかを客観的に判断するために、高校2年次の12月上旬に、「出願検討会議」を開催している。まずは生徒自身がベネッセの「総合学力テスト（11月模試）」の結果（学力）と「GPS-Academic（*2）」の非認知能力のスコア（思考力/姿勢・態度/経験）の2軸を使用し、自分がどの入試方式に適しているかを客観的に整理する（図5）。その後、教頭、進路指導部長、高校2年生の学年団など、計15人の教師が出席する同会議で、生徒自身の判断も踏まえて入試方式の検討を行い、全員で生徒の学習を支援する。

「一般選抜を考えていた生徒でも、高い非認知能力があれば、年内入試という選択肢を提示することもあります。教師の直感だけでなく、データを用いることで、生徒や保護者に対して説得力のあるアドバイスをを行うことができます」（進路指導部長・岡本慶一先生）

多面的な生徒把握により、 進路指導の納得感が高まる

「GPS-Academic」を通じて「批判的思考力」「協働的思考力」「自己管理」といった非認知能力が可視化されたことで、生徒の強みを見取りやすくなった。「客観的な指標と、担任だからこそ把握

している部活動の実績や性格などを総合して、生徒の納得度の高い進路指導ができるようになりました」（ICT探究教育推進室主任・野平剛史先生）

探究学習では教師は答えを示さず、ゼロから考えさせる姿勢を貫いている。「何もないところから価値を生み出す経験は、大学や社会で求められる創造性の土台となります。生徒が主体的に選り、行動する探究の経験こそが、高校卒業後の大学や社会に出てからの対応力につながると思います」（橋本校長）

データと経験、そして周囲の支援が重なり合うことで、生徒たちの進路選択はより確かなものになり、大学・社会へ続く主体的な学びの姿勢が育っている。



校長
橋本晃一
はしもと・こういち
同校に赴任して29年目。



ICT・探究教育推進室主任
高校2学年主任
野平剛史
のびら・たかし
同校に赴任して25年目。地理歴史・公民科。



進路指導部長
岡本慶一
おかもと・けいいち
同校に赴任して25年目。英語科。

*2 ベネッセが提供する、「思考力」「姿勢・態度」「経験」の3つの観点から、問題発見・解決する力を測定し、生徒一人ひとりの「強み」を明らかにするアセスメント。

社会の大きな変化を踏まえ、 視野を広げて現行の取り組み内容を捉え直す

本コーナーは、これまで「大学入試トレンド解説」として、大学入試の変化に着目し、その対策や指導上の留意点などをお伝えしてまいりました。今号からは、その視野を横（選択肢として大学に限定せず、大学以外の進路先も視野に含める）と縦（時間軸として「入試対策＝合格」に限定せず、入学後の活躍や成長のことも視野に含める）に広げたコーナーにリニューアルいたしました。

視野を広げた背景には、高校の役割にも影響を与えると考えられる社会のあり方の2つの変化があります。

1つは「VUCA時代（将来が予測不可能な時代）」です。技術革新や産業構造の変化により、現時点で有望とされる職業や学問分野が急速に価値を失う可能性があり、1つの進路・職業に依存するリスクが高まっています。将来にわたって学び続ける力や学び直す力を身につけることが求められます。また、社会課題が複雑化しており、単一分野の専門性だけではなく、文理融合や学際的な視点を持つことが今後一層重視されると考えられます。

もう1つは「人生100年時代（キャリアが単線的

(株)ベネッセコーポレーション
学校カンパニー 教育情報センター長
日山敦司 ひやま・あつし



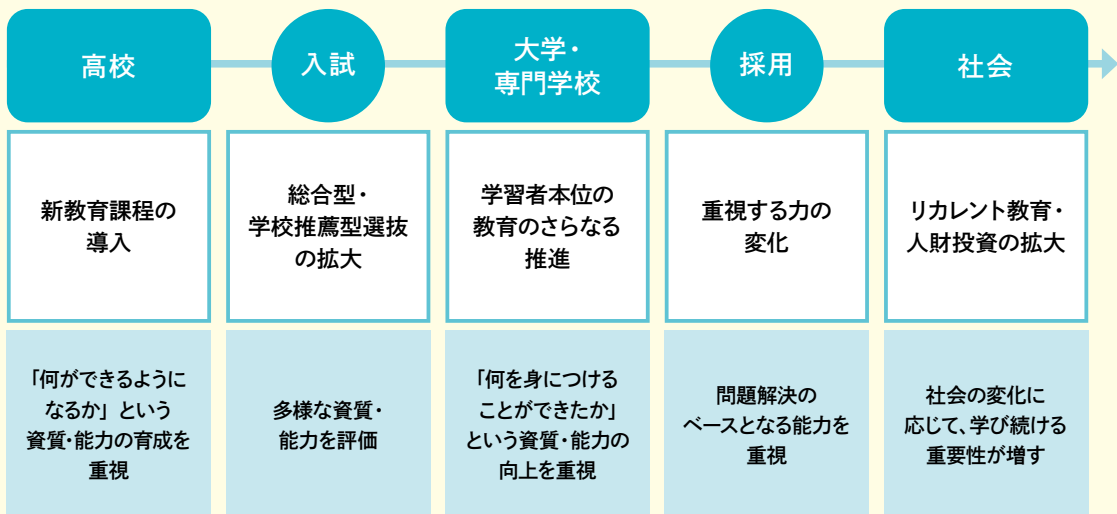
でなくなる時代)」です。定年まで1つの会社、1つの職業という前提は崩れつつあり、組織や制度に依存したキャリア形成が難しくなっています。高校卒業後の進路選択は「一度きりのもの」ではありません。自分の価値観や強みを理解し、主体的にキャリアを選択する力が不可欠となっています。

以上の2つの変化を踏まえると、高校時代から主体的に学び、そこから得た知識とスキルを汎用的に利用できるようにすること、正解のない課題に対して異なる専門性を組み合わせた解決アプローチを取ること、自分の興味・価値観・強みを言語化することの重要性が増しています。

本コーナーでは上記を念頭に置きながら、指導や教育課程、進路選択、入学者選抜などに関することについて、捉え方をアップデートしていただくための情報提供を行ってまいります。

図6 中長期の視点に立った資質・能力の育成

社会で活躍するための問題発見・解決能力などの思考力は、
高・大・専・社を一貫して育成することが重要



※中央教育審議会「我が国の『知の総和』向上の未来像～高等教育システムの再構築～（答申）概要」（2025年2月21日）と『令和の日本型学校教育』の構築を目指して（答申）【総論解説】を基に編集部で作成。